

「No Museum, No Life? — これからの美術館事典
国立美術館コレクションによる展覧会」展

会期：二〇一五年六月十六日―九月十三日 会場：美術館企画展ギャラリー「二階」

美術館に「作品」を展示する前に

田中功起

「作品」はひとつひとつ独立した単体として捉えられている。どこからどこまでが「作品」であるのかは、分かりやすく明確であるからこそ、コレクションとしても収蔵され、展示もできる。けれども、「作品」を単体として捉えるのではない考え方も存在する。このとき「作品」としての範囲は暫定的なものではなく、単独のものとしては判断されない。むしろ「作品」という考え方を拡張して解釈し、その暫定的な範囲はほとんどの場合、記録形式で示され、プロジェクトと呼ばれる。プロジェクトは継続的なものであり、プロセスとして提示される。それでもプロジェクトはプロセスを提示することで、「作品」としての暫定的な範囲を設定するから（それを「作品」と呼びうるかはここでは措くとして）、それによって単独なものとして捉えることができる。

では、さらに、その暫定的な範囲の確定できないものをどう捉えるべきだろうか。例えば「思想」や「態度」というようなもの。それらは「作品」や「展示」という問題の中でどう扱えばいいのだろうか。それははたして美術館という場所で展示できるのだろうか。

観客になることを望まない人々

少し遠回りをしよう。美術館に一度も訪れたことのない人々はいらるだろうか。もちろんいるだろう。ではその存在を考えてみる。

美術館に一度も訪れたことのない人々は、地元で美術館のないところに住んでいる人々かもしれない。美術館に一度も訪れたことのない人々は、地元で美術館があっても、美術に興味がない人々かもしれない。美術に興味があるが時間的、経済的な、もし

くは精神的な余裕がないために訪れたことがないのかもしれない。美術館に行くということを知らないだけかもしれない。美術館に一度も訪れたことのない人々は……。

この「現代の眼」を手にするあなたは、少なくとも一度は美術館を訪れた人だろう。いや、むしろこれを読むあなたは「専門家」と呼ばれているかもしれない。だからここに集められているテキスト群は、基本的にはそうした人々を対象にして書かれている。多くのこのテキストも、その前提にしたがっている。「美術館に一度も訪れたことのない人々」について、「美術館に一度は訪れたことのある、あるいはむしろ専門家」に向けて、このテキストは書かれている。

このテキストは誰に向けて書かれるべきだろうか。美術館とは誰のためのものだろうか。

美術館はすべての人々に開かれている

同時にそれは、専門的な研究機関でもある。収蔵／保存／研究がその基本であるはずだから、それを前提とした上で広く開かれていけばいいと思う。しかし、現在の日本の美術館の多くは、その開かれ方がむしろポピュリズムに陥っている。もちろんそれを美術館の側からの歩み寄りとして捉える向きもあるだろう。しかし芸能人による展覧会やアニメ会社の展覧会をし、あるいは新聞社や代理店と組んで海外の美術館コレクションなどの巡回展を開くことにどれだけの意味があるのだろうか。棲み分けはあってもいいと思う。貸し催事場としての美術館も実際には存在するわけだから。問題は、運営の側が考える「ポピュラリティ」によって美術館が開いているような態度をとるとき、そのポピュリズムが気に入らないとし、より美術館から遠のく人々のことだ。美術館はすべての人々に開かれている。もちろんすべての人々に興味をもつてもらうことは難しい。それならばむしろ安易な、手前勝手なポピュリズムに偏らない内容こそを守ることが美術館の役目ではないだろうか。

一見多数に開かれているような、ポピュリズムとしての現在の美術館を好まないという、美術館に一度も訪れたことのない人々を考えている。それらの人々の選択を、意識的にせよ、無意識的にせよ、「抵抗」として位置づけてみてはどうだろうか。観客になることを拒む、抵抗者としての、美術館に一度も訪れたことのない人々を考えてみてはどうだろうか。それらの人々が訪れる美術館を考えることはできるだろうか。

「私たちにはこれらの美術館は必要ではない。なぜならそれは私たちの望む場所ではないからだ。私たちには、私たちが望む別の美術館が必要である。そこには多様な意見を持つ観客が訪れ、観客たちは自由に発言をすることができる。笑いと怒

りが会場には溢れ、すべての観客が創造者であるような空間。美術史は、多様な意見によって更新され、入館料もなく、経済活動とも、行政機関とも独立した空間」。そんな場所は可能だろうか。そうした別の美術館を必要とする人々は、ほんとうは誰だろうか。

空転しない理由を考える

美術館で作品を展示することは、アーティストにとってどんな意味があるのだろうか。多くの人に作品を見てもらうため、だろうか。例えば「現代美術」の展覧会、それも「政治的」で、「コンセプチュアル」で、「実験的」なものは集客が望めないという。地方都市にある美術館でこのタイプの展覧会を行うと平日は十人も満たない観客しか訪れないと聞く。「多くの人に作品を見てもらうため」という理由が空転する。

そもそもこの理由は、それほど有効だろうか。市民に開かれた美術館であろうとするために、市民の多くが興味をもつ展覧会を行う必要がある。すべての市民が参加する展覧会を考えてはどうだろうか。老若男女あらゆる市民が作品を展示でき、作り手であり、観客である展覧会。美術館の民主的な解放。おそらくその民主化は機能しないだろう。市民のすべてが積極的に参加するわけではないだろうから、その温度差が市民を分断する。参加に積極的な人々と参加に消極的な人々が分かれ、一部の参加者のために市民の税金が使われているのちに批判が起きるだろう。あるいは「参加」は半ば強制的なものとして、同調圧力のように働き、消極的な人々を辟易させるかもしれない。そこにはある種の既得権益が生まれてしまうだろうし、ならば市民参加型の美術館という発想が間違っていたのかもしれない。むしろ美術館主導で自由に展覧会を組織させ、それによってできた展覧会について、市民が臆せず意見を言い合えるような、そういう方がいいのかもしれない。そのとき「政治的」で「実験的」で「コンセプチュアル」なものはむしろ有効だと思うのだけれども、なぜそうした展覧会は少ないのだろうか。

美術館で作品を展示するということは、アーティストにとってどんな意味があるのだろうか。例えば芸術は公共的なものであるから展示／記録／保存するべきである、と言われることがある。人類の営みの記録として、美術史は、それぞれの時代を反映し、翻弄されながらも制作をしつづけたある特殊な人々／アーティストの歴史である。つくるという営みを通して見えてくる人間の歴史がそこにはある。

そうした歴史化に違和感をもつアーティストもいるかもしれない。ここでも空転がおきている。歴史化の作業に距離を置く、現在の実践もあるはずだ。そんなアーティストの多くは社会へと介入し、公共性を問い、政治を考え、現実を直視しようとする。

いま現在のアーティストの実践のための場所を考える

いま、現在のために、一度、美術館という場所を手放そう。美術館を、従来の収蔵／保存／研究のための場所とだけ考え、アーティストのための活動の場所を別に求めているだろうか。美術館の外に、社会の中に、あるいは自然の中に。そうした現実の中で活動することを優先し、美術館をむしろ補給地のひとつとして再配置する。美術館はひとつの研究機関であり、リソース・センターへと変化する。資料（作品も含む）の閲覧、プロジェクト実現のためのサポートやスキルの提供、ディスカッションや対話の場としての情報や知識の共有など。アーティストはそこでさまざまに必要なことを補給し、現場へと出ていく。このことによって、美術館の機能は再考され、ポピュリズムの罠からも解放され、もしかすると観客になることを望まなかった人々もそこに集まり、共に考えることができるかもしれない。

「態度」を展示する

これらすべては「態度」に関係する。現状の制度では「態度」を展示することはできないと思われるだろう。しかしむしろ「態度」は美術館の中でこそ「提示」される。

「態度」は運営方法に現れる。それは些末な細部にこそ現れる。例えば展示キャプションをどうするか、カタログをどうするか、予算の使い方をどうするか、どのような組織運営をするのか、どのような教育普及を行うのか、監視員やボランティアとはどういうコミュニケーションをとるのか。そうした展覧会の中身とは無関係に思われるところにこそ、あなたの「思想」や「態度」はあからさまに可視化される。

エスタブリッシュされたアーティストはいつしか運営に込めるべき「態度」を手放してしまう。その些末な雑事と思われるところをキュレーターと共に考えること。美術館で「作品」を展示するまえに、「態度」こそが展示の中であからさまに「提示」されてしまうことを忘れないこと。美術館という場所をどのように捉え、「展示」をどのように考えているのか、それらがすべてあけすけに見えてしまうのだから。

態度を展示し、「美術館」「観客」「作品」「アーティスト」それらを再配置するとき、「美術」の可能性をもう一度考え直すことができるだろう。

(アーティスト)